令和６年度　入学試験問題

小論文

（芸術・スポーツ文化学科スポーツ文化専攻　一般選抜（前期日程））

注意事項

1. 試験開始の合図があるまでは，この問題冊子を開かないこと。
2. この問題冊子は，3ページ，解答用紙は2枚，下書用紙は2枚あります。
3. 「問1」「問2」すべてに回答すること。
4. 解答用紙は，「問1」「問2」ともに1枚あります。
5. 解答は解答用紙に横書きとし，句読点および段落の空白も1文字分とし，指定された字数内でまとめること。ただし，題・氏名は記入しないこと。
6. 受験番号は，すべての解答用紙の指定欄に記入すること。
7. 解答用紙2枚を提出し，問題冊子・下書き用紙は，試験終了後持ち帰ること。なお，いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
8. 試験中に，問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は，手を挙げて監督者に知らせること。

【問題】次の文章を読み、後の問1と問2に答えなさい。

昨年6月、札幌市中心部（東区）にヒグマが出没し、およそ8時間逃走するなか住民4人に重軽傷を負わすという衝撃的な事件が起きた。全国ニュースになったこともあり、その様子は記憶に新しいところである。この件も含め、令和3年のヒグマによる年間死傷者数は、統計が残っている昭和37年以降過去最多の12名（12月10日時点）となり、改めてヒグマに対する警戒や注意が高まっている。

明治時代の開拓以降、北海道に住む人々にとってヒグマは常に身近にある脅威であった。そのため、北海道庁の方針により、ヒグマは害獣として扱われ、長らく駆除の対象として奨励金が払われていた。特に1970、80年代には、冬眠明けのヒグマを狙った「春グマ駆除」が盛んに行われていた。その後、ヒグマの頭数減少もあったため、絶滅から共存へと方針が変更され、現在に至っている。しかし、未だにヒグマによる人身事故が起きていることもあり、現在も北海道に住む者にとって、常にヒグマの存在を意識して生活をせざるをえないのが現実である。

日常生活においてもこのような環境であるが、意図的にヒグマが生息する自然の中へ入る登山では、ヒグマとの接触がなおさら大きな問題となる。過去における登山中のヒグマとの人身事故に注目してみたところ、記録に残るヒグマとの遭遇による人身事故が5件（7名）起きており（統計の残っている昭和37年以降）、うち5名が死亡となっている。

その後、長らくヒグマによる登山者の人身事故は起こらなかったが、2019年7月、日高山脈カムイエクウチカウシ山で、登山者がヒグマに遭遇し襲われる事故が2件続いた。いずれの事故も、登山者は同じ場所（八ノ沢カール）で幕営し、早朝に単独での登頂最中にヒグマに遭遇したと思われる。どちらの登山者も鳴り物を携行していたにも関わらず、事故に至ったとのことである。

これまであまり事故が起きなかったからといって、ヒグマがいなくなった訳ではない。そのため、過去に起きた事故を教訓に、北海道で登山を行う際はヒグマの存在を踏まえて行動する必要があり、登山者はヒグマに関する知識や対処を備えた上で登山を行うことが重要である。そうでなければ、過去に起きた悲惨な事故と同じように、ヒグマとの接触による事故が起きかねない。

一方で、アイヌ民族の文化や習慣の影響もあり、ヒグマは畏怖や畏敬の念を抱かれる存在でもある。本州から日本人が移住するはるか昔から、北海道には多くの野生動物が生息していた。野生動物の視点から見てみると、もともと先住民として住んでいた生息地へ、後から日本人が移り住んできているのである。現在では野生動物保護の意識の高まりもあり、どのように共存すべきか、特に野生動物の生息地に入る際、いかに人間による影響を最小限にするかという考え方が広まってきている。

これらのことも踏まえて北海道の登山者は、ヒグマに対してどのような認識を持っているのか、また、ヒグマによる人身事故を避けるため、山に入り登山を行う際はどのような対策を行っているのか、その現状把握するための調査が求められる。

出典　濱谷弘志(2022)「北海道登山者のヒグマに関する認識について」山岳文化第 23 号,一部改編

問 1

この文章を 551 字以上 600 字以内に要約しなさい。(100 点)

問 2

北海道であなた自身がヒグマなどの野生生物の生息する自然の中へ入る際、野生生物との接触を避けるため、どのような意識や注意をすることが適切だと考えますか。また、野生生物に遭遇した場合の適切な行動はどのようなものだと考えますか。あなた自身の考えを 551 字以上 600 字以内で、具体的に述べなさい。(100 点)